

北山清太郎制作『浦島太郎』の 新資料発見について

渡辺 泰

Yasushi Watanabe

今年2017年は、国産アニメーション(以下、アニメと略)誕生100周年記念の年である。前年に『君の名は。』(新海誠監督)、『この世界の片隅に』(片渕須直監督)が大ヒットし、アニメ・ブームの余韻冷めやらぬ2月11日、ささやかながら日本アニメの歴史の上で発見があった。事の顛末を報告したい。

映像文化史研究家で、幻燈、玩具フィルム、映写機の蒐集家でもある松本夏樹が2007年7月、大阪・四天王寺境内の骨董市で、国産アニメ制作のパイオニア第2号の北山清太郎(1888～1945)が1918年に日本活動写真株式会社(日活)で制作した『浦島太郎』と推測される古い玩具フィルムと、パイオニア第3号の幸内純一(1886～1970)が1917年に制作した『なまくら刀』のフィルム及び玩具映写機を発掘した。『なまくら刀』は幸運にもメイン・タイトルがフィルムで確認された。一方、『浦島太郎』はメイン・タイトル部分のフィルムが欠損していたが、松本はフィルムの古さなど長年の蒐集家の経験や文献資料から北山の『浦島太郎』と判断した。アニメ創成期のフィルム発見は新聞の話題になった。

東京在住の新美ぬ系(ペンネーム)は戦前の売れっ子漫画家、下川凹天(本名・貞矩、1892～1973)はじめ戦前漫画家の研究者である。新美は下川が国産アニメ制作のパイオニア第1号であることも知っており、国産アニメ100年記念に自主アニメ制作者の森下豊美、映像作家の高田宛実と組んだユニット「Animation As Communication」らで、京都国際マンガミュージアムでの「につぼんアニメーションことはじめ ～『動く漫画』のパイオニアたち～展」(2017年4月6日～7月2日開催)の企画を実現させた。新美は同展開催に先立ち、大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵の『幼年世界』1918(大正7)年10月号に北山が制作した『太郎の兵隊 潜航艇の巻』の資料が掲載されている事実(松本の先行研究に拠る)^註を知り、2月11日、確認調査に同館を訪問した(新美は同館の特別研究員でもあった)。念のため1918年新年号から調査したが、3月号で思わぬ発見があった。松本がかつて発掘した『浦島太郎』とは物語及びキャラクターが全く異なる『浦島太郎』の図版写真18枚と物語が3頁にわたって紹介されていたのである。おまけにトップ・タイトルは『浦島太

郎』の文字と印刷が悪く判読し難いが日本活動写真株式会社、つまり日活の社名が記され、ラストには日活マークが掲載されていた。当時、日活でこのようなアニメ作品を制作していたのは北山しかいないので、北山作品と考えられる。

物語は民話の浦島で、亀を助けたことで、太郎は竜宮城の乙姫から歓待される。余興に乙姫は映画を上映し、スクリーンでは魚やタコたちが曲芸や踊りを披露する(映画の中で映画を映すアイデアが当時としては斬新だ)。故郷が恋しくなった太郎は別れを惜しむ乙姫からお土産の玉手箱をもらい、亀ならぬイルカみたいな巨大な飛魚に乗って帰郷するが、玉手箱を開けて白髪の老人に変貌してしまう。太郎も乙姫も三等身のキャラクターで可愛い。

新美の調査で、松本が2007年に発掘した『浦島太郎』は北山作品ではなかったことが判明した(作者は不明)。発掘者としての松本はさぞかし残念だったことだろう。新美はかつて発見された『太郎の兵隊～』含めて『幼年世界』誌上で北山作品5作を発見した。その作品題名及び映画公開年月日を以下に記す。

- ①『浦島太郎』(『幼年世界』8巻1918年3月号) 映画公開=1918年2月1日 浅草・オペラ館
- ②『金太郎』(『幼年世界』8巻1918年4月号) 映画公開=1918年3月16日 浅草・オペラ館
- ③『一寸法師』(『幼年世界』8巻1918年5月号) 映画公開=1918年3月20日 浅草・三友館
- ④『燕物語』(『幼年世界』8巻1918年6月号) 映画公開=1918年4月1日 浅草・遊楽館(注=雑誌掲載題名は『燕物語』だが、映画題名は『腰折燕』)
- ⑤『太郎の兵隊 潜航艇の巻』(『幼年世界』8巻1918年10月号) 映画公開=1918年8月4日 浅草・オペラ館

今回の発見は戦前の日本のアニメ資料が少ないうえに、貴重な発見と言えよう。今後、戦前のフィルムで北山作品らしきものが発掘されたとしても『幼年世界』掲載の5作品に関しては掲載図版と照合して題名を確定することが可能となろう。アニメ100年の記念の年に、新美の発見は日本アニメの歴史に少なからぬ貢献をもたらしたと思う。

フィルムセンターが日本アニメ100年の2017



▲トップタイトル「日本活動写真株式会社 浦島太郎」



▲亀を助ける浦島太郎。三頭身のキャラクター



▲ラストの日活マーク

上記3点とも「日本活動写真株式会社 浦島太郎」(『幼年世界』(1918年3月号)より。大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。

年、所蔵アニメ64作品をウェブサイトで視聴可能にしたのは、アニメファンにとって福音と言えよう。その中に松本が発掘し、北山作品とされた『浦島太郎』もあるため、僥越ながら筆者は新美、松本らと連名で新発見の経緯をフィルムセンターに伝え、訂正を依頼した。

多くのアニメファンは、古くさい過去のモノクロアニメより新作アニメに興味があろうが、100年前に下川、北山、幸内3人のパイオニアたちが試行錯誤しながら未知のアニメ制作にチャレンジしたことが、今日の日本アニメの興隆につながっていることを振り返ってほしいと願うものである。(文中敬称略)

(アニメーション史研究家)

註:松本夏樹「映画渡来前後の家庭用映像機器—幻燈・アニメーション・玩具映画」『日本映画の誕生』森話社、2011年。